日野ひかり幼稚園ファミリー通信

想像力を育てる「語り聞かせ」

私たちが幼かったころ、夜寝るときに母親が添い寝をしてくれて、いろいろなお話をしてくれたことを覚えていますか。
「桃太郎」「かちかち山」や「シンデレラ」など古今のお話をワクワクドキドキしながら聞くうちに寝入ってしまいましたよね。
ときには、同じ話を聞いて、話しの筋が違ってきたときに「お母さん、そこは違うよ」などと言って、母親を苦笑させたことはありませんか。
懐かしいでしょう。本当に私たちは親や祖父母など大人が語ってくれるいろいろなお話しを楽しむ、それが入り口になって本好きになっていったものです。

語り聞かせは子どもの想像力を育てると言われます。
それはなぜなのでしょうか。例えば、「桃太郎」を例に考えてみましょう。母親が「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」と話すと、子どもは「お母さん、昔っていつのこと？」と疑問に思ったことを聞きます。
母親は「昔は昔よ」と答えにならない答えを言います。
そして、「おじいさんは山へ芝刈りに・・・」と話すと、また、子どもは「芝刈りってなあに？」と聞きます。
母親も芝刈りの意味が分からず、「うー。お父さんに聞いてみて」とはぐらかします。
家に芝刈り機のある家庭でしたら、子どもはそれを想像しますよね。さらに続けて、「おばあさんは川へ洗濯に・・・」。
子どもはすかさず。「何で、川でするの、洗濯機ですればいいじゃない・・・」と不思議がります。
こんな具合に昔話は子どもにとって疑問だらけです。
でも、繰り返し聞くうちに、子どもの頭のなかでいろいろな想像をしています。
「大きな川だと中に入ってできないな。それじゃ、浅い、小さな川なのかな？」「桃の中から生まれた子どもって、どんな子かな？」「桃って、どのくらいの大きさかな？」などといろいろな空想の翼を広げます。
毎回同じ話を聞かされても、子どもは飽きることがありません。
そのたびにいろいろな想像をしているのです。
こういったあれこれ空想する力、想像する力が幼児期に育まれていくと、やがてお話しから挿絵がなくなる本に出会っても、文章だけで読み取って楽しむ豊かな想像力がついていますよ。

大切にしたい手先・指先の遊び

子どもが誕生してから、お父さんもお母さんも子どもの成長に人一倍関心を持って育てます。
特に、ハイハイからつかまり立ち、歩くといった足の成長は目に見えて育っていきますので関心が強い傾向にあります。
この足の成長と同様、手の育ちも大変大事なのですが、とかく忘れられがちです。
ドイツの哲学者カントも「手は外に現れた脳」と言っているくらい、手先・指先は頭脳と直結しているのです。
ですから、幼児期の頭脳を良好に発育させるためにも、手先・指先をたっぷり使った遊びを大いにさせたいものですね。
具体的な遊びは、子どもたちのまわりにたくさんあります。
特に、造形活動に顕著です。
折り紙、お絵かき、粘土やはさみを使った遊びです。
また、何も造形遊びだけではありません。
くつのひも結び、シャツのボタンかけ、クッキングでのお手伝い、歯磨きなど、それこそ日常生活の中できっかけはたくさんあります。
これらのことをできるだけ子ども自身に経験させることが大事なのです。
ともすると、のろのろ遅くてイライラするといって、ついつい手出し、口出しをしてしまうケースも少なからずあるようです。
どうですお母さん、心覚えがありませんか？
お子さんのすることを、どうぞ、あせらず、気張らず、あたたかく見守ってあげてください。

目を離さない、手は離す

2歳を過ぎますと、子どもは何でも一人でやりたがります。
シャツの「ボタンはめ」やお出かけの際の「靴をはく」ことなど、一生懸命奮闘しますがなかなか出来ませんよね。
お母さんはじれったくなり、ついつい手を出したりしたことがあるのでは・・・。
まあ、分からなくはありませんが、余計な手出し口出しは子どもの自立心の芽を摘んでしまうことにつながります。
イギリスの諺に「馬を水飲み場に連れていくことは出来るが、水を飲ませることは出来ない」という言葉があります。
要は、周囲の適切なガイドは必要ですが、肝心なことは自分でしなければならない、ということでしょうか。
これでもお分かりのように、親は常に子どもの安全に配慮し、目配り、気配りをすることは大事ですが、必要以上の手出し、口出しはせず、じっと見守るのも大事であるということです。
しかし、「見守ること」、これが結構難しい。
子どものやるスピードは超スローですから、どうしても待ちきれず、イライラしてしまいます。
でも考えてみてください。
私たち大人は子ども時代から現在までに、シャツの「ボタンはめ」や「靴をはく」ことを何百回、何千回と何回繰り返してきたでしょうか。
上手に早く出来るのはあたりまえです。
でも、子どもはこれからなのです。
子育ては、いってみれば忍耐、「じっとがまん」の忍耐です。
この忍耐をしないと、子どもはどんどん自立の道から遠ざかりってしまいます。
やがて子どもが小学校へ上がると、プールの際の服の着脱をはじめ自分でやるらなければならないことがたくさん待っています。そのとき我が子だけがオロオロしていたら、たまらないでしょう。
幸いこの時期のお子さんは「何でもやりたがり屋さん」です。親の忍耐は当然のことと割り切って、「目を離さず、手を離す」ことに専念しましょう。